

作家・土木史研究家

高崎

TAKASAKI
Tetsuro

哲郎 さん に伺いました

聞き手

溝瀨 利明
編集委員

[writer] 駒崎 文男
[photo] 崔 健三

土木界の先輩である青山士の考えは今でも古くなってはいない
ぜひ今日の土木技術者にも彼の精神を受け継いでほしい

2008年6月27日（金） 法政大学

7年半にわたってパナマ運河工事に参加

——高崎先生は青山士の本をお書きになったり、講演をなさったりしていますが、どんなところに興味をもたれたのでしょうか。

高崎——青山士は東京帝国大学教授の廣井勇ひろいさむの強い影響を受けました。また、廣井勇と札幌農学校時代の同級生だった内村鑑三のキリスト教の影響を受けて、生涯キリストの教えを忠実に深く信じていった人です。青山士を語るうえでまず挙げたいのは、何と言ってもパナマ運河工事に灼熱地獄のなか7年半にわたって参加し、アメリカの技術陣もびつくりするようなすぐれた業績を残したことです。パナマ運河博物館には青山士のコーナーがつくられています。それを不思議に思わないくらいの素晴らしい業績だった

のです。彼は末端の測量技術者からスタートして、7年半で高度な設計、施工を委ねられる技術者にまで昇進し、アメリカ政府から「エクセレント」と、最高の評価を受けました。

彼は残念ながら完成を見ずに帰国しましたが、帰国してからも東京から水害をなくすために荒川放水路を約15年かけてつくり、梅雨や台風シーズンには、軒下まで洪水がくるのが毎年当たり前だった東京の下町を救ったというの、大きな功績です。都民は感謝すべきでしょう。

その後、新潟土木出張所長を経て技術官僚の最高ポストである内務技監になりましたが、特筆すべきは、土木学会の会長として土木技術者の倫理はかくありたいということと日本工学会で初めて明確に打ち出したことです。技術者の清廉潔白に生きていく姿勢や、研究内容の情報公開などの訴えは、今でも生きています。すし、彼の土木技術者としての集大成がそこに明確にうたわれています。

今年、青山士は生誕130年、没後45年を迎えます。私自身、今年の秋に青山士の新たな評伝を出そうと調査しているところですが、今でも尊敬してやみませんし、彼の考えは少しも古くなっていないことに驚いています。ぜひ今日の土木技術者にも彼のストイックな精神を受け継いでほしいと願っています。

その身の処し方や強い精神力に心打たれる

——青山士に一番共鳴できる点はどこなところですか。

高崎——まず、その身の処し方の清廉さです。たとえば、彼のところに業者がビール瓶などをもつてくると、追いかけて行って返し、どこの会社の人間かを問いただしたうえで、お前のところは厳しい査定をせざるを得なくなる、そういうアンフェアなことをしてはいかんと叱った、などというエピソードは多くあります。

また、その強い精神力にも心を打たれます。私もパナマに2回ほど行きましたが、本当に蒸し暑く、蒸し風呂に入っているようでした。そのようなところに7年半もいて、きちんと実績を残して帰ってくる。そこには、一つひとつのことを諦めず、どうにかして完成につなげていくのだという彼の強い決意があります。それは、土木技術者の重要な資質だと思います。ですから、新潟の大河津分水は巨額な国の予算を投入したのに、激流で水没したときには、そのいい加減な施工や維持管理に対して彼は大変怒ったそうです。このエピソードから国民の生命財産を守るためにいいものをつくるのだという、土木技術者の決意を感じます。大河津分水の記念碑には「万象三意ヲ覚ル

者ハ幸ナリ」「人類ノ為、国ノ為」と刻まれています。ここには青山の哲学が表現されています。私は国内の土木記念碑で最高のものと信じます。

技術者の生きざまをもっと伝えていくべき

——近代土木の証言者や資料がだんだんと減っていくなかで、過去の土木技術者の姿を今に残し、伝えていくことは大切ですね。

高崎——土木技術者の先輩にこんなに素晴らしい業績を残し、良き規範となる人がいたということを一般の人たちにアピールしていくことは、土木学会の重要な役割だと思います。技術論もいいですが、それだけでは国民に土木技術

者の姿や精神が見えませんが、素晴らしい橋、防波堤をつくったというだけでなく、その向こうにそれをつくれるだけの技術者がいて、その技術者の生きざまがこんなに素晴らしいのだということも見えるようにしたほうがいいのではないのでしょうか。たとえば、青山士にしても、パナマという日本とは遠い熱帯雨林の国で運河博物館が3階のフロアをすべて使って紹介していることは、日本では一般には知られていません。私が書いた廣井勇や青山士の本を読んだ人は、なんでもっと早く自分たちの手に取って読める本が出なかったのか、映像や映画に表現されなかったのだろうか、熱意をこめて語られます。

——土木は建築のように個ではなく、全体で行うもので、日本の礎である社会基盤をついているから、表に出て行くことはない。それ以上訴えることはないという思いがあります。

高崎——その謙虚さはいいところなのですが、一方でマイナスになっているのではないのでしょうか。たとえば、土木学会で人物を紹介していくための委員会をつくって、本を出したり、講演をしたり、映像にしてほしい。鉄道でも、橋梁でも、上下水道や河川改修などでも、さまざまなジャンルで、偉大な人がきら星のごとくいるわけですから。ぜひ事業化して、せめて10人の伝記、10冊くらいを初めに出してほしいと思いますし、いまや議論している段階ではありません。具体的に動き、発信していくことを強く願っています。私ももちろん協力します。



高崎 哲郎(たかさき・てつろう)さん プロフィール

1948年栃木県生まれ。NHK記者、帝京大学教授を経て、土木研究所などの客員研究員や東京工業大学などの非常勤講師も務める。著作は20冊余りで、青山士と廣井勇の評伝英訳本もある。